

富士五湖における漁業実態の解明—Ⅳ

～ ワカサギ流通実態調査及び全体のまとめ ～

大浜秀規

ワカサギは富士五湖の主要な漁獲対象魚種である。最も漁獲量の多い山中湖の流通実態を明らかにすべく、ワカサギ流通実態調査として、山中湖のワカサギを販売する小売店への聞き取り調査を行った。また、これまでに報告した4つの富士五湖漁業実態調査の全体のまとめを行った。

材料及び方法

山中湖ワカサギ流通実態調査は、山中湖漁協関係者からワカサギを取り扱っている小売店を確認し、平成24年3~4月にかけて直接小売店の関係者から聞き取りを行った。

富士五湖漁業実態調査の全体のまとめとして、これまでに報告した3つの報告¹⁻³⁾、増殖事業調査、漁業実態調査、遊漁実態調査と今回のワカサギ流通実態調査を総括し、相互の関係について検討を行った。

結果及び考察

山中湖ワカサギ流通実態調査

山中湖村内においてワカサギを取り扱う小売店として2軒の魚屋と1軒のコンビニエンスストアの計3軒が確認された。年間取扱量は多い時に10~100kg、不漁時には取り扱いがない場合もあった。販売単位は500~1,000gで、販売単価はキロ当たり500~2,000円と幅があった。購入者はどの小売店でも保養所と近隣住民が殆どであったが、販売していることを聞いた旅行者や、飛び込みの客、遊漁者のお土産用に釣り宿が購入する場合もあった(表1)。小売店Bは店の主人が定置網をかけていることから、3つの小売店の中でも年間取扱量が多く、また販売単価も安くなっていると考えられた。この店のワカサギは生のみを取り扱い、ウナギも取れれば販売をしていた。

表1 小売店での販売状況

	年間取り 扱い量(kg)	販売単位 (g)	販売単価 (円/kg)	購入者			
				保養所	近隣住民	旅行者	釣り宿
小売店A	0~50	500	2,000	◎	◎	○	
小売店B	約100	500又は1,000	500~1,000	◎	◎	○	○
小売店C	5~10	1,000	2,000	◎			

また、各小売店から次のような情報が得られた。

ワカサギ漁については、「2月15日から定置網が解禁され、3月初旬が最盛期で5月中旬まで続く。4月にはいると魚が黒くなり、順次小さい魚が産卵していき、産卵後は硬くなる。風があるときに網に多く入り、ダメなときは全く入らない。」とのことで、販売されるワカサギが漁獲されている期間は、3月を含む前後1か月が中心であった。

ワカサギのサイズについては、「満足されるためにはサイズが重要で、型が小さいとフライにできず、天ぷらか唐揚げにしかない。生での販売は、その日が勝負。冷凍にすると小さいワカサギは崩れるので、サイズの良いものしか冷凍できない。このため型の良いものは注文があったもの以外は直ぐに冷凍する。刺網で捕れる魚の

型は良いため、単価が高い。」とのことで、フライに及び冷凍にしやすい大型のワカサギに対する需要が高かった。なお、山中湖ではここ数年、ワカサギは豊漁であるものの、フライになるサイズの漁獲はほとんどなく、小売店の要望に答えられていない状況である。

需要については、「(現在取り扱ってきた倍の) 100k g あっても売れると思う。電話での問い合わせや予約もあり、入荷を待っている人は多い。」とのことで、宣伝等は特に行われていないものの、供給を上回る需要があると考えられた。

流通等については、「以前は山中湖村でも加工を行う店が2軒あった。村内のいくつかのホテル、レストラン、食堂でもワカサギを提供している。」とのことであった。加工を行う店は集荷も行い、大量の漁獲があった場合の調整弁になっていた可能性がある。このため加工業者のなくなったことが、現在の「こんなに沢山もらっても困る」というような状況を生じさせた一因になっていることが考えられた。また、地元産のワカサギをどの店で扱っているかという統一的なデータや表示はなく、ブランド化を図るのであれば今後この点についても検討が必要と考えられた。

富士五湖漁業実態調査の全体のまとめ

富士五湖漁業実態調査は、富士五湖においてワカサギ、ヒメマス、ヘラブナ、そしてオオクチバス等の漁業が行われている。しかし、漁業の実態については、漁業権や規則の内容、遊漁料や増殖実績等の資料以外には、35年前の「相模川の魚と漁」⁴⁾と60年前の「甲斐の魚」⁵⁾程度しかない。漁獲量については、昭和57年まで五湖別ごとの漁獲統計があったが、その後県全体にまとめられ、それも平成19年までで終了となり、それ以降公式な数値はない。さらに、流通の実態についても、詳しく調べられたことはなく、流通の有無も含め不明となっていた。そこで、既存資料の取りまとめと関係方面へのアンケートを行うことで、富士五湖における漁業・遊漁及び漁獲・流通の実態の概要を掴むことを目指し、増殖事業実態調査、漁業実態調査、遊漁実態調査、ワカサギ流通実態調査を行なった。

増殖事業実態調査では、①竿釣りを行う組合員の負担額は、5,000～8,000円で、遊漁料の年券と同じかやや安いこと、②組合員数はやや減少傾向の組合があるものの、ほぼ変化のない組合もあること、③遊漁料収入は、漁協により金額が大きく異なっていること、④増殖放流は、漁協により魚種と金額が異なり、ほぼ全てが種苗の放流であること、⑤増殖の努力が組合により異なっていること、⑥効率的な増殖事業のためには、継続的な指導が必要であること、などが明らかになった。

漁業実態調査では、①ワカサギはどの湖でも最も重要な魚種であること、②主要な漁獲対象魚種は、ワカサギ、コイ、フナ、ウナギ、ヒメマスの5魚種で、対象魚種の9割を占めること、③年間漁獲量は山中湖のワカサギが、1,376kg/年と突出して大きいこと、④船を持つ人は積極的に漁業を行っていると考えられること、⑤漁獲魚の利用は、自家消費が半数以上を占め、無料で配るを加えると8割以上になること、⑥山中湖のワカサギは販売が利用形態の32.1%にのぼり、その量は442kgと推計されること、⑦湖の魚の好きな食べ方として17種類の回答があり、ヒメマスの鱒味噌など地元特有の食べ方もあること、⑧キロ当たりの平均販売単価は、ウナギ2,833円、ワカサギ1,861円であること、などが明らかになった。

遊漁実態調査では、①ボート等利用者の対象魚種は湖で異なり、山中湖はワカサギ、河口湖はオオクチバス、精進湖はヘラブナ、西湖及び本栖湖はヒメマスが主要対象魚種であること、②ボート等利用者の平均漁獲尾数は、山中湖、西湖、精進湖でワカサギが他魚種に比べ突出して多く、河口湖では全ての魚種において4尾以下であること、③推定漁獲尾数は、山中湖のワカサギが219万尾と突出して多いこと、④山中湖における遊漁者のワカサギ釣獲量は4,380kgで、これは組合員の推定漁獲量の約3倍の量であること、⑤河口湖で釣獲されたオオクチバスの最大全長は、平成24年までの過去22年間で増加傾向にあること、⑥一日にオオクチバスを20尾以上釣った

人は、平成 14～16 年に 22～53 名いたが、平成 17 年以降はいなかったこと、オオクチバスの大量釣獲がなくなったのは、放流直後の釣堀状態での乱獲がなくなったためと考えられること、などが明らかになった。

ワカサギ流通実態調査では、①山中湖村内においてワカサギを取り扱う 3 軒の小売店を確認したこと、②年間取扱量は多い時に 10～100kg であること、③販売単価はキロ当たり 500～2,000 円であること、④購入者はどの小売店でも保養所と近隣住民が殆どであること、⑤ワカサギのサイズについては、フライ及び冷凍にしやすい大型のワカサギに対する需要が高いこと、⑥供給を上回る需要があると考えられること、などが明らかになった。

これら 4 つの調査において多くの事項が明らかになり、効率的な増殖事業を実施するための継続的な指導の実施、山中湖のワカサギ需給のミスマッチを解消する流通体制作りへの検討、資源を有効利用するための誇らしい食文化の紹介やコイ、フナの活用の検討を行うことが今後期待される。

また、各々の調査結果を比較することで次のような結果が得られている。

漁業者の多くはワカサギを最も重要な対象魚種としているのに対し、ボート等利用者の対象魚種は湖ごとに異なり、漁業者と遊漁者で異なること（図 1）。また、ワカサギの場合でも漁業者はサイズを重要視するのに対し、遊漁者は釣獲数を重要視するなど、そのニーズが異なっていた（大浜未発表）。

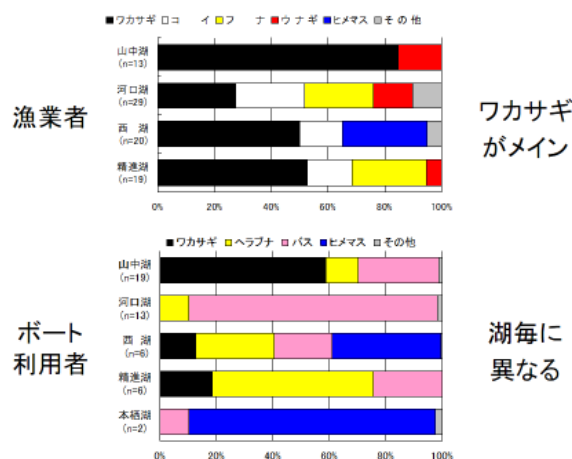


図 1 漁業者とボート等利用者の対象魚種の違い

さらに、山中湖のワカサギについては、遊漁者の釣獲量 (4,371kg) は漁業者の漁獲量 (1,376kg) の約 3 倍であり、この全体の水揚げ量 (5,747kg) は、2g 換算で 287 万尾になるが、ワカサギ卵の放流量は 3.4 億粒でふ化仔魚数は、これにふ化率の 60% をかけた 2 億尾となる。ワカサギ水揚げ量の 287 万尾は、このふ化仔魚の 1.4% と推定される。この再捕率については、一般的な種苗放流に比べると低い値ではあるが、通常の放流が稚魚放流であるのに対しワカサギは卵またはふ化仔魚の放流であるため、一概に比較することはできない。一般に若齢期の死亡率が高いことを考えれば、ある程度妥当な数値と言えるのかもしれないが、この点については他の調査等により、今後明らかになることを期待したい。

また、各湖でアンケートの対象者や回答率が異なっていることもあり、算出された数値を厳密に比較することは適当でないが、各湖における漁業実態の概要については把握することができたと考えられる。

ただし、遊漁者の動向については、今後レンタルボート以外の陸釣り、マイボートの遊漁者についても調査を

行い、遊漁者全体の動向について把握する必要がある。

今後も引き続き富士五湖で漁業が行われるためには、効率的な増殖事業を推進するための関係者間の調整とそれらに関する指導が重要と考えられる。また、山中湖のワカサギについては流通経路の整備による、経済価値の向上が期待されることから、需給のアンバランスを解消する流通体制づくりが望まれる。さらに、特定外来生物に指定されているオオクチバスについては、将来的な方向性を引き続き検討する必要がある。

要 約

1. ワカサギ流通実態調査として、ワカサギを取り扱う小売店に聞き取り調査を行った。
2. 山中湖村内においてワカサギを取り扱う2軒の魚屋と1軒のコンビニエンスストアの3軒が確認された。
3. 年間取扱量は多い時に10～100kgに、不漁時には取り扱いがない場合もあった。販売単価はキロ当たり500～2,000円と幅があった。
4. 購入者はどの小売店でも保養所と近隣住民が殆どであった。
5. ワカサギのサイズについては、フライ及び冷凍にしやすい大型のワカサギに対する需要が高かった。
6. 山中湖のワカサギは供給を上回る需要があると考えられた。
7. 全体のまとめとして、これまでの4つの調査を総括して検討を行った。

文 献

- 1) 大浜秀規(2013)：富士五湖における漁業実態の解明－Ⅰ－増殖事業実態調査－. 山梨県水産技術センター事業報告書,41,19-24.
- 2) 大浜秀規(2013)：富士五湖における漁業実態の解明－Ⅱ－漁業実態調査－. 山梨県水産技術センター事業報告書,41,25-32.
- 3) 大浜秀規(2013)：富士五湖における漁業実態の解明－Ⅲ－遊漁実態調査－. 山梨県水産技術センター事業報告書,41,33-37.
- 4) 平塚市博物館編(1978)：相模川の魚と漁 相模川流域漁撈習俗調査報告書（平塚市博物館資料No.11）. 平塚市教育委員会, 平塚市. 222pp.
- 5) 寺田重雄(1955)：甲斐の魚. 山梨県水産研究会, 山梨. 189 pp.